

「どんな／どういう＋名詞」型質問 - 応答連鎖における優先構造

ますだ 将伸
増田 将伸

甲子園大学

masuda@koshien.ac.jp

1. はじめに

質問 - 応答は、様々なコミュニケーションの媒介となる基本的な行為の対であると言える (Schegloff 2007: 75ff.)。それゆえ様々な研究がなされてきたが、従来の研究では、隣接対¹の第1部分である質問が応答の内容や形式に制約を課し、その制約を受けてどのような応答がなされるかを扱ったものが主であった。これに対して本稿では、応答の側に焦点を当てながら質問 - 応答によるコミュニケーションを分析する。具体的には、応答についてさほど制約を課さない「どんな／どういう＋名詞」を含む質問からなる質問 - 応答連鎖について会話分析の手法で分析を行う。この種の質問は、名詞を形容する内容ならば何を答えても字句上は適切な回答となるので、他の種類の質問の場合と比べると可能な応答の幅が広いと言える。このような場合にどのような応答がなされるかを分析することによって、質問にさほど依存しない形で応答上の優先構造を見て取ることが可能になる。質問 - 応答連鎖における優先構造はまだ研究途上であるが、このように応答の側に注目することで新たな方向からの分析を提示する。質問 - 応答はコミュニケーションにおいて重要な意義を持つ行為の対であるので、本稿の分析はコミュニケーション研究に新たな視座を提示するという役割を果たすものでもある。

2. 先行研究

隣接対の第2部分が優先的応答と非優先的応答に区分されることは先行研究で指摘されてきた (Levinson 1983: 332-345, Schegloff 2007: 58-96)。「優先的」とは、第2部分として産出する複数の応答可能性の中で第1部分の働きかけに沿う発話タイプのことを指す。例えば依頼に対する応答では受諾が優先的であり、拒絶が非優先的である。形式面の特徴については、優先的応答がしばしば単純な形式をとる一方で、非優先的応答はフィラー、ヘッジ、説明語句などを含めて長くなったり、複雑な組み立てになったりすることが多い。応答の冒頭や途中で間が空くことも多い。

ただし質問に対する優先的／非優先的応答は、依頼の場合のように発話タイプの対照性ではなく、「質問による働きかけに沿う応答であるか否か」という機能面から検討される (Schegloff and Lerner 2009: 112ff.)。基本的な隣接対において応答者が非優先的応答を返そうとした場合、質問と関連する発話ならば回答として聞かれてしまうために、「質問と関連

するが発話タイプとして回答ではない発話」を非優先的応答として想定することができないからである²。

質問 - 応答連鎖での応答についての先行研究は、質問による働きかけによって内容面や形式面の制約が課される中でどのような応答がなされるかという論点のものが主である。Stivers and Hayashi (2010) では、(1), (2) のように応答者が質問によって課された制約を超えた応答を行う多様な手続きが記述されている³。

(1) [SD]

- 1 CIN: An'my favorite(0.2)part was going in thuh z-(0.3)
 2 uh_m thuh z:ero freezer. Zero below.
 3 (0.5)
 4 DAD: →[O:h. (It was) zero degrees in there?
 5 CIN: [Zero-
 6 MOM: [Mm hm:,
 7 CIN: ⇒[It was zero degrees in there_[an'-
 8 DAD: [And what was inside
 9 hhuh huh/((coughing))

(Stivers and Hayashi 2010: 3)

(2) [JAPN1684]

- 1 キョウコ: [う::ん.
 2 マユミ : [.hhh >あそう<ナナオとロビン(0.4)カップルなんだってさ::..
 3 (0.2)
 4 キョウコ: →ナナオでも辞めるんでしょう.
 5 (0.3)
 6 マユミ : ⇒クビ.
 7 (0.6)
 8 キョウコ: らしいですよね:=[え カ]ップルなの::?=
 9 マユミ : =[う::ん.]
 10 マユミ : =カップルなんだ[ってさ:.]
 11 キョウコ: [へえ::::]

(Stivers and Hayashi 2010: 4-5; 原論文ではローマ字によるトランスクリプト)

(1) では、4 行目の確認要求質問で用いられた形式を反復する形で Cindy が 7 行目で回答している。これは、単に“Yes”か“No”で回答する場合とは対照的なふるまいであり、問われ

た事柄について自分の方が認識的権限 (epistemic rights) を持っているということを主張するものである (cf. Schegloff 1996, Heritage and Raymond forthcoming)。 (2) では、確認要求質問 (4 行目) で用いられた「辞める」という定式化を「クビ」へと変更して回答する (6 行目) ことで、マユミはキョウコによる定式化を適時的に修正している。

このように質問による制約に対して応答者が抵抗を示す手続きとしてもうひとつ注目されてきたのが、応答に前置きを付けるという手続きである。 (3) はその一例であるが、北京大学で近代詩を教えた Sir Harold Acton に対するインタビューである。

(3) [Chat Show: Russell Harty_Sir Harold Acton]

1 Act: hhhh and some of thuh-(0.3) some of my students
2 translated Eliot into Chine::se. I think thuh very
3 first.

4 (0.2)

5 Har: →Did you learn to speak(.)Chine[:se.]

6 Act: → [..hh Oh yes.

7 (0.7)

8 Act: .hhhh You ca::n't live in thuh country without speaking
9 thuh lang[uage it's impossible .hhhhh=

10 Har: [Not no: cour:se

(Heritage 1998: 294)

Acton 卿の経歴や卿の学生達の優れた業績 (1~3 行目) を考えると、Acton 卿が中国語を習得したのは自明のことである。このわかりきった事柄についての質問 (5 行目) に対して、Acton 卿は単に“*Yes*”ではなく“*Oh yes*”と回答している (6 行目)。このような前置き“*Oh*”は応答者の知識状態に変化があったことを有標化し、それによって質問が応答者にとって予想外のものであったことを示す。このような働きは、関連性、適切性や前提など何らかの点で質問に問題があったことを応答者が示す手続きとして利用されている (Heritage 1998: 293-295)。“*Oh*”以外の前置きを用いた同様の手続きについても多数の研究がなされている (Bolden 2009, Hayashi 2009, Schegloff and Lerner 2009, Kushida and Hayashi 2010)⁴。

これらの研究では、応答は質問によって課される制約との関連から記述されてきた。これに対して本稿では、応答の内容や形式についてさほど制約を課さない「どんな／どういふ＋名詞」を含む質問からなる質問－応答連鎖を分析対象とすることで、応答自体により焦点を当てて質問－応答連鎖を分析する。これによって、質問にさほど依存しない形で応答上の優先構造を検討し、研究途上である質問－応答連鎖の優先構造について新たな方向からの分析を提示する。

3. 分析対象

本稿では、『日本語話し言葉コーパス』の対話音声の中の「どんな／どういう＋名詞」を含む質問からなる質問－応答連鎖を分析対象とした。対話音声は同じ話者によって「模擬講演インタビュー」「自由対話」の2種類が収録されており、各16対話ある。前者は、対話の録音に先立ってインタビューが行ったスピーチである「模擬講演」の内容について、それを聴いていたインタビュアーが尋ねるものである。後者では、話題の制約なく会話が行われている。いずれも10分強続く二者対話で、コーパスに含まれているのは音声データのみである。

「どんな／どういう＋名詞」型の質問は、名詞を形容する内容ならば何を答えても字句上は適切な回答となるので、他の種類の質問の場合と比べると可能な応答の幅が広いと言える⁵。このように応答についてさほど制約を課さない形式の質問を分析対象とするため、「具体的には」など、応答内容を制約するような前置きを伴う質問は分析対象から除外した。その結果、分析対象となった「どんな／どういう＋名詞」を含む質問は「どんな」17例、「どういう」23例の計40例となった。「どのような」「どういった」などの同義表現を含む質問は見られなかった。

4. 分析

分析の結果、(a) 包括的かつ簡潔な応答、(b) 複数の説明による応答、(c) 長い説明による応答の3種類の応答が確認された。また、(a) の応答が可能なときには (a) が優先され、(b), (c) は何らかの事情で (a) の応答が難しいときの次善の手続きとして用いられていることが明らかになった。以下でこれらの点について詳述する。

4.1 包括的かつ簡潔な応答

包括的かつ簡潔な応答は (4), (5) のようなものである⁶。

(4) [D03M0017:0199-0223:00303.478-00337.798]

1 Y: →.hh ええじゃああの.hhh 猿

2 (0.3)

3 Y: →は:もう続けてないっ<て:ゆって>たんで:=

4 d: =は[いい]

5 Y: → [そ]のあと

6 (0.4)

7 Y: →は=>そのあとから今<[(0.9)]どんな

8 d: [.hh]

9 (0.2)

- 10 Y: →ことをやってる[のか]聞きたいんですけど[.hh]
 11 d: ⇒ [.hh] [ええ] そのあとから今[は=
 12 Y: [h-
 13 d: ⇒=で[すね:] (.) ええと: .hhh 猿の前から
 14 Y: [はい]
 15 (0.3)
 16 d: ⇒やってる話なんですが:=
 17 Y: =は[いい]
 18 d: ⇒ [視]覚と:(.)ええと:聴覚の関係という(の/もの)[を:(0.7)=
 19 Y: [hm hm
 20 d: ⇒=ええ:::
 21 (0.5)
 22 d: ⇒研究テーマ(n)
 23 (0.7)
 24 d: ⇒に[やっ]てます
 25 Y: [はい]
 26 (0.4)
 27 Y: 具体で[きにはど]んな?
 28 d: [.hhh] 具た]い(h)に(h)は(h)で(h)す(h)[ね(h)]=
 29 Y: [はい]
 30 d: =え::と:((話題を続ける))

(5) [D01M0047:0214-0219:00261.806-00272.823]

- 1 X: →.hhh じゃあ[実際そ]の
 2 i: [.hhh]
 3 (0.6)
 4 X: →けん修が終わったあとやった仕事°っていうのはどういうことだったんです
 5 →(か).°
 6 (0.2)
 7 i: ⇒もう:
 8 (.)
 9 i: ⇒全然違います↑よ今:みたいな,研究職ですね.
 10 (0.2)
 11 X: あ.h そうな[<んだ::>
 12 i: [ええ:::

- 21 X: =mm::: .hhh もうエビのかおりがたっぶ[り]
 22 N: [t] .h もすっごい(お/え)-
 23 おいしかった(で/え)(h)す(h)hhh

(7) [D01F0030:0224-0249:00343.090-00377.402]

- 1 X: →.hhh どんな曲をひい(て)たんですか?
 2 (0.2)
 3 E: 1⇒°ええと::°いろいろやる:んですけ[れども, プ]ラスバンド用に作られた曲=
 4 X: [mm::]
 5 E: 1⇒=も(.)あります[し: .hh]と, クラシック:の曲[を:アレンジ]して:
 6 X: [ええええ:] [mm::]
 7 (0.2)
 8 E: 1⇒[プラスバンド用に作ったものもあ]りますし:[.hh で歌謡曲みたいなのも=
 9 X: [mm : : : : : : : :] [.hh mm : : : =
 10 E: 1⇒=.hh やっ(.)<てみたり:(れ)>すね.hh]特に演奏会のような場合=
 11 X: = : : : : : : :]
 12 E: 2⇒=には[: (0.3)え]:と:: .h あまり堅い(.)というか[: (.)]知られて=
 13 X: [hm : :] [.tch ええ:]
 14 E: 2⇒=ない曲をやっても.hh つまらな[い:だろうというので: .hhh]え:と:=
 15 X: [ああ : : : : : :]
 16 E: 2⇒=例え>ばクラシックをこうつなぎ合わせたメドレ[一のよ m:<のをやって=
 17 X: [mm : : : =
 18 E: 2⇒=みたり][.h 映画音楽をやっ>たりっていうおな.<]
 19 X: = :] [あ : : : : : : :] あ::[:な[る]ほどね:=
 20 E: °[は:[い]]°
 21 E: =°ん°は:い

これらの対話では、前節のように包括的な応答がなされていない。(6)では「前菜」「冷たいもの」「サラダ仕立て」「ソースは結構クリーミーなソースだった」(9~19行目)という複数の説明を用いて応答がなされている。また、応答の前に0.8秒の長い間があったり(8行目)、「なんていうんですかね」「ま」「っていう感じ」などのヘッジが用いられていたり(11~18行目)と、非優先的応答に特徴的な非流暢性が見られる。Nの話している内容からすると、Nは料理がおいしかったということ以外は料理のことをあまり覚えていないようである。これは回答の資源となる記憶が定かではないという状況であるので、Nがこのようにな不十分な資源に基づいて回答を返そうとした結果、非優先的な応答形式になったと考え

られる。すなわちこの例は、万全でない状況下での次善の手段として複数の説明による応答が用いられていることを示している。

(7) も同様である。応答発話冒頭の「いろいろやる」(3行目)はある意味では包括的かつ簡潔であるが、曲の内容がこれだけではわからないので「ブラスバンド用に作られた曲」「クラシックの曲をアレンジしてブラスバンド用に作ったもの」「歌謡曲みたいなもの」と具体例を3つ挙げ(1⇒)、さらに演奏会の場合について「クラシックをつなぎ合わせたメドレーのようなもの」「映画音楽」という具体例を挙げている(2⇒)。この例では、演奏する曲の種類が多岐にわたるので包括的かつ簡潔な応答が難しいという状況で、次善の手段として複数例の列挙という方法によって応答がなされている。

4.3 長い説明による応答

長い説明による応答の例を(8),(9)に挙げる。

(8) [D03F0045:0278-0303:00400.864-00436.025]

((Nはヨーロッパの宗教画について話している。))

- 1 N: >そう(で)すね<宗教がかった芸術は
- 2 (.)
- 3 X: [hm : :] : へ(h) : : : : : °なるほど°じゃア↑メリカとかには全然=
- 4 N: [(.)好きです]
- 5 X: =きょ°う味は[ないの°]
- 6 N: [.hhh]アメリカあんまり興味ないです
- 7 (.)
- 8 N: [アメ]リカきら:い((「きら:い」はおどけた口調))
- 9 X: [mm]
- 10 (.)
- 11 N: [行っ ↑た]ことないけど:::=
- 12 X: [(y)əh(h)a(h)]
- 13 X: =¥そ[う な ん だ ¥ (.).hhh]
- 14 N: [.hhh行ったことないけどなんかあ](れ).hhあんまり,いい::イメー
- 15 ジじゃない(で)[すね
- 16 X: → [m:::どういう
- 17 (0.3)
- 18 X: →イメージ
- 19 (.)
- 20 X: .hhhhh]

- 21 N: ⇒ mm] う::>なんか<
 22 (0.7)
 23 N: ⇒自分達が一番だとおも[ってんじゃないの;(0.3) 文化もないくせに
 ((おどけた口調))
 24 X: [.tch(0.2) ああ:::.....
 25 (.)
 26 N: ⇒[¥みたいな¥a(h) h(h)a a(h) h(h)a .hh h(h)u h(h)u h(h)u h .hh=
 27 X: [əə(h) h(h)a h(h)a h(h)a h(h)a h(h)a h h h h h h h h =
 28 N: =自国文化ないくせに:とか(.)əhh][h(hh) .hh]
 29 X: = h h h h h h h h] [.hhh そうだよ]ぬ::絶対そう思う::
 30 .hhh 誰かこう:アメリカ人で知っている人とかはいますか;

(8) で N は、自分が行ったことがない国であるアメリカのイメージを尋ねられている。行ったことがない国について回答するということは、回答の資源となる知識が十分でない状況で回答することになるので、(6) と同様に不十分な資源に基づいて回答を返すことになる。そのため (8) での応答は簡潔とは言えない長いものになっている。実質的な応答の前に 0.7 秒の長い間がある (22 行目) のに加えて、フィラー「う::」(21 行目) や「なんか」「みたいな」といったヘッジ (21~26 行目) も見られ、非優先的応答の特徴が備わっている。

(9) [D03M0038:0078-0107:00082.448-00119.400]

((Y は大学か短大で美術を学んでいた。))

- 1 c: →.hhh どういう絵が好きですか,;
 2 (.)
 3 Y: ⇒.hhh ど(h)ういう絵.
 4 (0.2)
 5 Y: ⇒.hh 最近::
 6 (0.9)
 7 Y: ⇒なん- あんまり::
 8 (0.5)
 9 Y: ⇒絵とか見てないんですけど::.
 10 (.)
 11 Y: ⇒[こ(h)]ないだ:.hh[hh] あ:え- う()- 最近だんだんまた:絵もいい=
 12 c: [ええ,] [ええ]
 13 Y: ⇒=なって思ってきてて::.=

- 14 c: =は:
 15 (0.6)
 16 Y: ⇒あ:の:
 17 (1.1)
 18 Y: ⇒(ざ/だ)っしで:[今度:]メトロポリタン美術館をやる:とか書いたあっ=
 19 c: [mm:]
 20 Y: ⇒=て[:
 21 c: [hm[m:::]]
 22 Y: ⇒ [.hhh]°そこ°にちっちゃく<バル>テュスの絵が(0.2)あ- 載って
 23 ⇒て,=
 24 c: =へえ:=
 25 Y: ⇒=あ(h):::(.)いいー [よか-]いいよな::と(h)か(h)お(h)[も(h)い?=
 26 c: [mm] [həhəhə=
 27 Y: ⇒=(.) .hh[おも]い起こして[たと]こです h[hhh]
 28 c: =hə::: [hə] [hm] [ああそ]う=
 29 Y: =[はい(.) .hhhh [hhh (.) [.hhhh]この仕事は=
 30 c: [hmm:: .hh この[仕事はどうしては[じめ (0.4)°たの.°]
 31 Y: =あの::: .hhh ((続く))
 32 c: [ええ

(9) で注目すべきなのは、質問の対象となっているのがYが専攻した事柄だということである。美術を専攻したYは、絵画に関してはcからある種の「専門家」と見られる。その意味で、ここでのYの回答は単にYの嗜好性を示すだけでなく、Yの専門性の高くないし見識をうかがわせるものとなる。したがって、この質問はYにとって無造作には答えにくく、回答に慎重を要するものとなっている。

そのような事情を反映して、(9)での応答は簡潔ではなく、非常に長く複雑なものになっている。まず、Yの応答は質問の一部を反復することから始まっている(3行目)。これは、応答者が応答の途中にはあるがすぐには応答できないことを示す手続きである(Bolden 2009: 136)。またYは「最近あんまり絵とか見てない」(5～9行目)と言うことで、実質的な回答に入る前に自らの「専門家」としての権威を否定している。そして、結局最後までYは自分が好きな絵の種類を明確には述べない。(9)での応答はYがバルテュスの絵が好きであることをうかがわせるものではあるが、字句上は「Yが雑誌で見つけたバルテュスの絵を気に入った」という域を出ない内容であり、Yがバルテュスの絵一般を好きなのかどうかはわからない形になっている。

この例では、回答に慎重を要するため簡潔な応答がしにくいときに長い説明による応答

がなされるということが確認された。間やフィラーが多く含まれていることや直接的な回答でない形で応答がなされていることなど、(6)～(8)と同様に非優先的応答の特徴が見られるという点にも留意されたい。

5. まとめ

本稿では、応答についてさほど制約を課さない「どんな／どういう＋名詞」を含む質問からなる質問－応答連鎖について会話分析の手法で分析を行った。分析の結果、(a) 包括的かつ簡潔な応答、(b) 複数の説明による応答、(c) 長い説明による応答の3種類の応答が確認された。また、(a)の応答が優先的に用いられ、(b), (c)は(a)の応答が難しいときの改善の手段として用いられていることが明らかになった。(b), (c)の応答がなされている例はいずれも(a)の応答が難しい性質の質問－応答であり、応答が非優先的応答の特徴を示しているという事実がこの分析を裏付ける。

(10)では、長い応答の中に本稿で論じた様々な特徴が含まれている。(10)の検討を通じて対話参加者が(a)の応答に指向していることを改めて確認し、本稿の結びとしたい。

(10) [D03F0036:0340-0385:00475.741-00546.705]

- 1 X: .hhh スクールって: [(.)].h その::あ(h).h どのく↑らい
- 2 K: [ええ]
- 3 (0.2)
- 4 X: >長くやってらっしゃるんですかとも<[うテニス.]
- 5 K: [スクール]う::んとやっ↑ぱり::
- 6 この::ろ↑く年前にこの町に来てから[:.(0.2)]nなので:=
- 7 X: [ええ.]
- 8 X: =じゃあもう[:長い(れ)す[ね:]
- 9 K: [.hhh [↑で]も5ね↑ん:ぐらいですかね.=
- 10 X: 1⇒=[ん::: そ]のくらいやっ(.)て[らっ]しゃる方に対する[:ス]ク(h)=
- 11 K: [(.)ん::::] [うん] [ん:]
- 12 X: 1⇒=- (h)ル(h)の(h)こう:練習ってど(h)ういうもんなんです°(か)°.h[h]
- 13 K: 1⇒ [で:]
- 14 1⇒も: な↑かなかあの:上にいかないうちによくけがするんで:=
- 15 X: =↑ああ[:]
- 16 K: 1⇒ [.hh]ん:[↓:::]で[も(.)どう]:(な/で)(ん)(し/じ)よう=
- 17 X: [.hhh] [hh]
- 18 K: 1⇒=あの:: .hh い↑ろんなショットが打てるように[って>例]えくばあの:=
- 19 X: [ええ::.]

- 20 K: 1⇒=トップスピンが打てたり:スライス:[が 打 て た り:].h フラットが打つ=
- 21 X: [ええええええええ]
- 22 K: 1⇒=(.) [てたりとか, .h]h>あとなんか<うんあの:うん:
- 23 X: [ええ ええ ええ]
- 24 (0.2)
- 25 K: 1⇒.hh>どうですか<ね:もちろん
- 26 (.)
- 27 K: 1⇒フォアバック:うん全部ですか[ね : : : :].hh>↑なん]か<↑さ:ん=
- 28 X: [す<ご>いですね] : : : .]
- 29 K: 1⇒=種類ぐらい球種を:
- 30 (0.2)
- 31 K: 1⇒打てるように:?=
- 32 X: =えええ[えええ.]
- 33 K: 1⇒ [.hh]うん[>という<こ じょう ことは や]っ(.).terんですね:=
- 34 X: [やってるんですか:.]
- 35 X: 2⇒=.hh じゃもうただ打ち返すだけじゃなく: .h[h こう]:
- 36 K: [うん:]
- 37 (.)
- 38 X: 2⇒下切ったりとかも[>やってるわけですね<]
- 39 K: 2⇒ [あ : うん だから]あい手にいかに n- 取りにくい
- 40 2⇒ボールを返すかで:=
- 41 X: =うん::[:ん]
- 42 K: 2⇒ [うん::]んと,まあ自分が あの劣勢になったときはロップかなんかで
- 43 2⇒逃げる[んですけど:](.).h]hh ても: いかに:相手がいなく[て:.=
- 44 X: [え え] : :] [.h =
- 45 K: 2⇒=.hhh しかも]間に合っても取れな (h) い (h) ボ (h) ールをか (h) え (h) す=
- 46 X: = う : ん]
- 47 K: 2⇒=か:?=
- 48 X: =(ろ)::[::::ん]
- 49 K: 2⇒ [うん を:]をやってるみ[たいです:

(10) の質問には「そのくらいやってらっしゃる方」という定式化が見られる (10 行目)。これは、K が 5 年テニスをしている熟練したプレーヤーであるという X の認識を示すものである。K は (9) と同様、実質的な回答に入る前に「でもなかなかあの:上にいかないうちによくけがする」と話して、熟練者用の練習をあまり知らないことをうかがわせ、まず自

らの「専門家」としての権威を否定している (13~14 行目)。その後「どうでしょう」あるいは「どうなんでしょう」と聞こえる発話をしている (16 行目) ことも、K がこの質問に回答しにくいことを示している。

その後実質的な回答内容に移るが、「いろんなショット」という抽象的な応答の後で具体例を列挙する方法は (7) と同様である (18~22 行目)。さらに (10) では、それだけで終わらず「全部」「3 種類ぐらい球種を打てるように」と包括的かつ簡潔な応答を続けている (27~31 行目)。このような包括的かつ簡潔な応答への指向は、続く質問 - 応答にも引き継がれている。35~38 行目の確認要求質問に対して K は「相手にいかに取りにくいボールを返すか」「いかに相手がいなくてしかも間に合っても取れないボールを返すか」という 2 種類の包括的応答を返している (39~47 行目)。

(10) は、「包括的かつ簡潔な応答がしにくいときに次善の手続きとして複数の説明や長い説明による応答が用いられる」という、本稿で確認してきた質問 - 応答連鎖の優先構造を改めて示す例である。加えて (10) では、まず次善の手続きを用いて応答した後、それを包括的かつ簡潔な表現でまとめてから応答を終えようとする指向性が確認できる。これは質問 - 応答連鎖における包括的かつ簡潔な応答への指向性を明確に示すものである。

本稿では応答の側に焦点を当てた質問 - 応答連鎖の分析を行い、研究途上にある質問 - 応答連鎖の優先構造について新たな知見を示した。今後質問による働きかけとより関連付けてこの現象を議論することで、本研究で新たに得られた知見と先行研究の知見を融合させることが可能になる。質問による働きかけとの関連という観点から今回の分析結果をとらえると、応答において簡潔さが指向されていることは『日本語話し言葉コーパス』での質問による働きかけと一見矛盾する。同コーパスでは会話を 10 分間続けることが参与者に指向されているため、インタビュアーによる質問は単に情報を要求する質問ではなく語りを要求する質問 (Fox and Thompson 2010: 136) であると考えられるからである。この点について今後分析を進める必要がある。また、「どんな／どういう＋名詞」型に留まらず様々な質問 - 応答連鎖を分析し、コミュニケーション研究として発展させることも今後の課題である。

注

* 本稿は、京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した博士学位論文“Question-responses in Japanese Interview Dialogues: Examination of *Doo*-type Q-word Questions”の第 3 章“‘Donna/dooyuu + noun’ type Question-response Sequences in Information-seeking/giving Process”を基に加筆・修正を施したものである。

1. 隣接対の特徴は基本的には以下のようなものである (Schegloff and Sacks 1973: 295ff., Schegloff 2007: 13ff.).

(a) 異なる話者による、隣接した 2 つの発話順番から成る。

- (b) 2つの発話順番は第一部分と第二部分から成る。第一部分は何らかのやり取りを開始する発話タイプ（質問、依頼、申し出、招待、告知など）であり、第二部分は第一部分によってなされる行為に対応する発話タイプ（回答、受諾、拒否、同意、不同意など）である。
2. 拡張した隣接対においては挿入連鎖を考慮しなければならないために議論がもう少し複雑になるが、本質的には本文での議論と異ならない。また、本稿では「相手の働きかけに反応する発話」のことを応答 (response)、「相手に質問された内容を答える発話」のことを回答 (answer) と呼んでいる。
3. 対話例に付されているアノテーション記号の一覧を以下に示す。これらは基本的には Gail Jefferson によるものに依拠している。
- = 間を置かない発話順番の移行、同一話者による発話の間を置かない継続、または同一話者による複数行にわたる発話の継続
 - [発話の重なるの開始点
 -] 発話の重なるの終了点
 - : 音の引き延ばし（: が多いほど長い）
 - 語断片- 言いさし
 - (数) 沈黙（数は秒単位で長さを表している）
 - (.) マイクロポーズ（0.2 秒未満の沈黙）
 - h 呼気または笑い（h が多いほど長い）
 - .h 吸気（h が多いほど長い）
 - .h 笑いながらの吸気（引き笑い）（h が多いほど長い）
 - (h) 呼気または笑いながらの発話
 - ¥語句¥ 笑っているような声色
 - ↑語 上昇音調
 - ↓語 下降音調
 - 平板な音調
 - ? 発話末尾の上昇音調（疑問符ではない）
 - ゝ 発話末尾の上昇音調（? より上昇幅が小さい）
 - , 発話継続を示す音調
 - 語: 強勢を帯びた発話末尾の上昇音調
 - >語句< 速い発話
 - <語句> ゆっくりの発話
 - 音節 強勢
 - °語句° 小さな声の発話

(語句) 聞き取りが不確かな発話

((語句)) 筆者による注釈

→ 分析対象となる質問

⇒ 分析対象となる応答

4. 質問による制約に対して応答者が抵抗を示す手続きについて論じた代表的な研究として他に Raymond (2003) と Fox and Thompson (2010) がある。ただしこれらで論じられているのは応答発話の文法形式を利用して抵抗を示す手続きであり、本稿で扱う行為の内容の優先構造とは別に、質問が課す形式面の制約との関連で論じられるべき性質のものである (Fox and Thompson 2010: 153)。Raymond (2003) はこうした形式面の優先構造のことを型一致 (type-conformity) と呼び、行為の優先構造 (preference) とは別の概念としてとらえている。
5. 「どんな／どういう＋名詞」型の質問－応答連鎖でも、応答に対してある程度の制約は課されている。例えば (3) に出てくる「どういう料理だったの」という質問の場合、応答は料理に関連する事柄である必要がある。本稿で「どんな／どういう＋名詞」型質問のことを「応答についてさほど制約を課さない」と記述しているのは、このような「全く制約を課されないわけではないが、他の形式の質問に比べると可能な応答の幅が広い」という特徴のことを指している。
6. 以降の対話例で、話者 X・Y はインタビュアーであり、大文字話者は女性、小文字話者は男性である。

参考文献

- Bolden, Galina B. 2009. Beyond Answering: Repeat-prefaced Responses in Conversation. *Communication Monographs* 76: 121-143.
- Fox, Barbara A., and Sandra A. Thompson. 2010. Responses to *Wh*-questions in English Conversation. *Research on Language and Social Interaction* 43 (2): 133-156.
- Hayashi, Makoto. 2009. Marking a 'Noticing of Departure' in Talk: *Eh*-prefaced Turns in Japanese Conversation. *Journal of Pragmatics* 41: 2100-2129.
- Heritage, John C. 1998. *Oh*-prefaced Responses to Inquiry. *Language in Society* 27: 291-334.
- Heritage, John C., and Geoffrey Raymond. forthcoming. Navigating Epistemic Landscapes: Acquiescence, Agency and Resistance in Responses to Polar Questions. In Jan-Peter de Ruiter (ed.), *Questions: Formal, Functional and Interactional Perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kushida, Shuya, and Makoto Hayashi. 2010. Responding with Resistance to *Wh*-questions in Japanese Talk-in-interaction. *The 12th Annual International Conference of the Japanese Society for Language Sciences*: 13-16.

- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Raymond, Geoffrey. 2003. Grammar and Social Organization: Yes/no Interrogatives and the Structure of Responding. *American Sociological Review* 68: 939-967.
- Schegloff, Emanuel A. 1996. Confirming Allusions: Toward an Empirical Account of Action. *American Journal of Sociology* 102 (1): 161-216.
- Schegloff, Emanuel A. 2007. *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel A., and Gene H. Lerner. 2009. Beginning to Respond: Well-prefaced Responses to *Wh*-questions. *Research on Language and Social Interaction* 42 (2): 91-115.
- Schegloff, Emanuel A, and Harvey Sacks. 1973. Opening up Closings. *Semiotica* 8: 289-327.
- Stivers, Tanya, and Makoto Hayashi. 2010. Transformative Answers: One Way to Resist a Question's Constraints. *Language in Society* 39: 1-25.

コーパス

国立国語研究所・情報通信研究機構 2008 [2004]. 『日本語話し言葉コーパス』（第2版）